The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四四年一月-四月 創作発表媒体縮小期における執筆活動
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 32-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57187
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼1944年1月

・アメリカ軍、クェゼリン島・ルオット島に侵攻。日本軍六八〇〇人が玉砕。

▼2月

・アメリカ軍、マーシャル諸島占領。

・アメリカ軍、トラック島を空襲。日本軍は艦船四三、航空機二七〇を失う。

▼3月

・日本軍、インパール作戦を開始。

▼4月

・日本軍、中国で大陸打通作戦を開始。

【社会】

▼1月

・女子挺身隊結成（一九～二五歳までの未婚女性を軍需工場などに動員）。

・改正防空法による初の疎開命令発令。

▼3月

・高級料理店・待合・芸妓屋・バー・酒店の閉鎖令が警視庁より出される。

・全国の新聞が夕刊を廃止。

一九四四年一月―四月　創作発表媒体縮小期における執筆活動／斎藤理生

一九四四年二月一八日、アメリカ軍がトラック島に襲来。日本軍は太平洋中部の拠点を失う。伊藤整は翌朝の新聞で知った。「日本はどうなるのだ。開戦以来こんなぎょっとした事は無い。戦況は緊迫して来た」（『太平洋戦争日記（二）』新潮社、一九八三・九）。今や「考えうるあらゆる危急の場合を考えねばならない」。だが「この国家危急の日にも、私たちは、子供の入学がうまく行くことを念じたり、預けてあるバターが無くなりはしないかと心配したり、服装を気にしたりしている」。作家も一人の生活者である。取り返しのつかないことが起こりつつあることに気づきながらも、日常の諸事に追われ続ける。三〇年後、中村光夫は回想している。「実際、昭和十九年になると、敗戦の徴候はますますはっきりして来ました。と言うより、もう勝てるとは誰にも思えなくなったが、負けたら一体どうなるのか、どうすればよいのか、見当がつかない状態といった方が当っているかも知れません」（『文学回想　憂しと見し世』一九七四・一一、筑摩書房）。

文学者たちの動揺をよそに、創作を表現する舞台は、刻一刻と縮小してゆく。「綜合雑誌は三誌へ」（『朝日新聞』一九四四・一・二一）が報じるように、綜合雑誌は「公論」「現代」「中央公論」のみが残り、「改造」「文藝春秋」は専門誌に転身させられた。菊池寛「話の屑籠」（『文藝春秋』一九四四・三）は、「本誌が綜合雑誌として、何か欠格があつたやうに、誤解され易い」ことへの「弁明」の形を装いつつ、綜合雑誌として最大部数を誇り、「ひたすら戦争遂行に協力した」のに文藝雑誌にされることに、強い不満を滲ませている。「改造」も四月号から「時局雑誌」となり、小説は載せなくなる。頁数も、一月号は一〇四頁だったのが、五月号には六四頁になった。むろん雑誌統合の波は幅広く及んでいる。やはり四月、東京で出ていた同人雑誌「文藝主潮」「辛巳」「正統」「文藝復興」「新文学」「新作家」「昭和文学」「小説文化」の八誌は「日本文学者」に統合される。

しかもそうした雑誌を、文学者たちでさえ入手しづらくなってきていた。すでに前年末

【文化】

▼1月

・青山杉作・千田是也・東野英治郎ら、俳優座を創立。

▼2月

・日本文学報国会小説部会協議会「大東亜五大宣言小説執筆希望者」開催。

・「あの旗を撃て」（東宝映画）

▼3月

・宝塚歌劇団休演前最終公演。

・歴史文学賞（財団法人奉仕会）決定。中沢亞夫『阿波山岳党』。

▼4月

・「一番美しく」（東宝映画）

・近松秋江没。

の段階で、芳賀檀が「文藝時評　真摯な地盤　「国家的な私小説」への置換へ」（「東京新聞」一九四三・一二・四）で「この頃雑誌がなかなか手に入りにくいので、久しぶりにたくさんの雑誌を見る機会を得たことは、嬉しいことであつた」と述べていたが、伊藤佐喜雄は「四月号の作品」（「文藝」一九四四・五）で、「中央公論、公論、文藝、文學界だけしか手に入らなかつた」とこぼしている。谷崎精二も「四月文壇覚え書」（「早稲田文学」一九四四・五）で「四月号の諸雑誌の発行が大分遅れた。これは一時的の現象でもあらうが、時局が緊迫した事を知らせる雑誌の記事よりも、発行が遅延したと云ふ事実その物の方が我々に対して無言の、だが力強い警告である」と指摘している。

新聞小説にも変化が見られた。一九四四年元旦から「読売報知」朝刊で連載が始まっていた丹羽文雄「今日菊」は、三月五日に唐突に終わる。「夕刊廃止に伴ひ、小説を一本建てとするため」夕刊に連載されていた濱本浩「海員」が朝刊に回されたのである。濱本は海軍報道班員として、直前まで南太平洋の最前線にいた。その経験が活かされた「海員」は同年七月二四日まで連載された。なお、同時期に「朝日新聞」で連載されていたのは火野葦平「陸軍」である（一九四三・五・一一～一九四四・四・二五）。紙面が制限される中で、より戦争遂行にふさわしい作家・作品が掲載されたのである。

そのような状況において、火野の活躍は顕著であった。ただ火野は酷使されていた。浅見淵は「小説月評」（「新潮」一九四四・二）で、「多作から来てゐると思はれる無意識の疲労感が稍々筆力の制動機を弛ませ、同時に表現を沈ませ、もう一段の溌剌さを欠いてゐる」と指摘していた。それでもメディアは火野を求めた。浅見は「文藝時評」（「早稲田文学」一九四四・四）で、「改造」と「中央公論」について「両誌の編輯者は火野葦平か上田廣の作品さへ載せて置けば、何か厄除けでもしたやうな気持になつてゐるのではなからうか」と批判した。〈お墨つき〉の少数の作家に依頼が殺到する状況。そこには、数年後に太宰治らが寵児になったときとは異なる切迫した事情があった。

【代表作】

▼1月

・太宰治「佳日」（「改造」）

・坂口安吾「黒田如水」（「現代文学」）

・太宰治「新釈諸国噺（↓「裸川」）」（「新潮」）

・火野葦平「雨季」（「中央公論」）

・立野信之「松濤」（「日本評論」）

・横光利一『旅愁（第五回）』（「文學界」）

・上林暁「小便小僧」（「文藝」）

・新田潤「童顔の鷲」（「文藝」）

・高木俊朗「平林中隊長傳」（「文藝春秋」）

▼2月

・高見順「ウ・サン・モンのこと」（「現代」）

・小野十三「登攀」（「国民文学」）

・儀府成一「碑文」（「文學界」）

・火野葦平「兵隊と言葉：「軍隊手帖」の第三章」（「文學界」）

・劉寒吉「古戦場」（「文學界」）

・坂口安吾「鉄砲」（「文藝」）

太宰は一九四四年一月、「新釈諸国噺」と「佳日」を発表した。前者は後に「裸川」と改題。「終戦前、太宰の著書の中で、一番版を重ねた」（津島美知子『回想の太宰治』一九七八・五、人文書院）という単行本『新釈諸国噺』（一九四五・一、生活社）の起点となる。後者は「散華」などと同様に、時局を意識した作品と言えよう。三月に『雲雀の声』が出版不許可になるという事件はあったが、旺盛な創作活動を維持し続けた時期だと言ってよい。

一月の太宰の小説について、浅見淵は前掲「小説月評」で「頁が薄くなると同時に、しぜん雑誌の創作欄は短篇に限られて来たが、かうなると目立つのは個性の際立つた作家の作品」だとして上林暁、尾崎一雄らと共に「甚だ個性的臭みの強い作家である」太宰の両作品を取りあげている。澁川驍は「新年号の小説」（「文藝」一九四四・二）で、個々の作品は必ずしも認めていないものの、「どんな時にでもすぐ座談の中心を占めて、その場を明るく賑やかにする不思議な人物」のように「作品を読むと、つい何とかいひたくなる」太宰の魅力は評価していた。外地にも熱心な読者はいた。佐藤春夫は後年「稀有の文才」（『現代日本文学全集』月報、一九五四・九、筑摩書房）で、次のように回想している。

昭和十八年の秋、南方の戦線に出かけて行った自分は十九年の春、昭南でデング熱に冒されて一週間ほど病臥した事があつた。その時、偶、ホテルの人が枕頭に持つて来てくれた『改造』のなかにあつたのが彼の『佳日』といふ短篇であつた。自分は一読して今更に彼の文才に驚歎した。（中略）自分は窮余のつれづれに、いつまでも枕頭にあつた『佳日』を日課のように毎日読んだ。

太宰はこの時期、大東亜五大宣言の五原則の文学作品化も計画していた。「中国の人をいやしめず、また、決して軽薄におだてる事もなく、所謂潔白の独立親和の態度で、若い周樹人を正しくいつくしんで書くつもり」「百発の弾丸以上に日支全面和平に効力あらしめんとの意図を存してゐます」（「惜別」の意図）。折しも「文藝」一九四四年一月号で「大東亜文学作品集（一）」として中国の蘆焚、フィリピンのアルギリヤの作品がそれぞれ小田

▼3月
・上田廣「春色」（『改造』）
・織田作之助「木の都」（『新潮』）
・太宰治「散華」（『新若人』）
・石塚友二「青春」（『中央公論』）
・堺誠一郎「応急派兵」（『文學界』）
・火野葦平「眼と心と指：軍隊手帖」第四章」（『文學界』）
・若杉慧「青色青光」（『文學界』）
・火野葦平「草原の町」（『文藝』）
▼4月
・久生十蘭「爆風」（『新青年』）
・織田作之助「白鷺部隊」（『新創作』）
・尾崎士郎「十三夜」（『中央公論』）
・八木義徳「劉広福」（『日本文学者』）
・火野葦平「名と弾丸：軍隊手帖」第五章」（『文學界』）
・壷井栄「勝つまでは」（『文学報国』）

嶽夫および火野葦平の翻訳と紹介と共に掲載され、四月号の「大東亜文学作品集（二）」では満洲の爵青の作品（武田泰淳訳）が、北村謙次郎の満洲文学紹介と共に掲載されていた。同年二月の「文學界」の「編輯後記」には「大東亜建設の偉業を推進する為には、日華両大国は、相手の文化の本質を、お互にもつと明確に知悉しなければならぬ。吉川幸次郎氏の四十枚の力作「支那文章論」は、啻に日本の知識人のみならず、中国の人々にとつても示唆深きものであらう」と述べられていた。『惜別』はこのような背景の中で構想されていたのである。一方で、太宰がこの時宜にかなった企画に参入した理由には、現実的な利点の多さもあっただろう。「資料蒐めや調査について、紹介状、切符の入手等で便宜が与えられる上に、印税支払、用紙割当等でも、当時としては大変好条件を約束された」（津島美知子前掲書）という。

日々の生活と創作活動とに折り合いを付けること。みずからの資質に合った作品と、時局の流れに逆らわぬ作品を並行して発表すること。太宰はその危うい均衡の中で、すぐれた成果をあげたと言える。が、どの作家も同じようにふるまえたわけではない。平野謙は「文藝時評　遺著ふたつ　作家の幸、不幸に就て」（『文学報国』一九四四・五）において、「近代的な恋愛心理小説の極北」である「もつと光を」（『青年藝術派新作集　八つの作品』一九四一・一二、通文閣）を書いた井上立士のような作家が、晩年（井上は一九四三年九月没）に『編隊飛行』（一九四四・二、豊国社）という「もし署名がなかつたら、とても井上立士の作品とは受取れぬ一試作」「畑ちがひの素材」を書かざるを得なかったことに「今日の問題」を読み取っている。野口冨士男は後年「戦時は、私が自身の同世代のなかで最も嘱望していた井上までスポイルした」と悔やんだ（『感触的昭和文壇史』一九八六・七、文藝春秋）。なるほど太宰には、実家の支えをはじめ、数々の幸運があった。単純な比較はできない。が、太宰が一般的なイメージとは異なり、急変する環境にほどほどに合わせつつ書き続ける粘り強さとしたたかさの持ち主であったことは確かであろう。